

<報告・記録>

2022年度スポーツ健康学科冬季実習の報告

水野 はるな

東亜大学 人間科学部 スポーツ健康学科
h.mizuno@toua-u.ac.jp

《要旨》

東亜大学人間科学部スポーツ健康学科では、約2年ぶりに冬季実習が実施された。本稿は2022年度の冬季実習についてまとめたものである。さらに、参加した学生を対象に冬季実習における学生の取り組みと学修成果および満足度を調査した。この調査結果を基に、今後のスポーツ健康学科の冬季実習の在り方を検討した。

キーワード：冬季実習，スキー

1. はじめに

スキーは、滑ることを本質的な楽しみとしながらも、自然に接する楽しさ、社交や仲間づくりの楽しさ等があり、生涯にわたって多様な楽しみができるスポーツの1つである（日本スキー教程，2018）。しかし、近年スキーを含むウィンタースポーツの人気の落ちている。日本のスキー人口の推移をみると、1993年に1860万人とピークに達したが、それ以降減少傾向にある。現在は、350万人まで減少している（レジャー白書，2020）。減少した要因として、スノーボードの登場や、スキーやスノーボード以外のアクティビティが増加したことが挙げられる。さらに、スキーなどのウィンタースポーツは、都市部から離れた山岳地域で実施され移動に時間が掛かることに加え、また、道具やリフト券代等に経費が多く掛かることから、スキーやスノーボードは敬遠されていることが推測される（株式会社Pioneerwork，2022）。この傾向については、学校教育の場においても同様なことが窺える。宿泊を伴う学校行事の1つとして、スキーは実施されてきたが、近年は学校によっては実施していないところも多々見られている。たとえば、新潟県の学校体育調査（新潟県教育委員会，2020）によると、令和2年の授業、もしくは学校行事としてスキーを行っている学校は小学校50.0%、中学校30.1%、高校45.2%であった。一方、2015年の同調査の結果によると、小学校55.3%、中学校34.9%、高校55.0%であった。新潟県は日本の中でも2番目に積雪の多い地域であり、スキー場数も、長野県（79か所）、北海道（51か所）に次いで48か所存在する地域である（ビーウェーブ，2022）。そのような地域においてもスキーを行っている学校は減少しつつあるということは、全国的に見てもスキーを学校体育の授業、行事として行っているところは減少していると推察できる。さらに、その追い打ちをかけるように、新型コロナウイルス感染症の影響によりスキーを実施する学校はさらに減少していると考えられる。

一方、学習指導要領において、スキーについて、「自然と関わりの深いスキー、スケートや水辺活動などの指導については、学校や地域の実態に応じて積極的に行うことに留意するものとする。」と記載されている。このように、スキーは学校によって実施するところと、しないところと、様々

であるが、スキー活動は、単にスキー技術の習得だけでなく、自然に対する理解、集団行動・生活を通して、社会的スキルなどを修得する機会となりうるものがこれまでの研究によって明らかにされている（中澤ら，2014；田井ら，2012；村本ら，2019；田中ら，2021；熊谷ら，2022）。さらに近年、自然の中での遊びなどの体験が不足していること、現代の生徒に関して、自然との関わりを深める教育が求められていることから、諸条件が整っている学校においては、積極的に推奨するように記載されている（文部科学省，2018a）。また、「児童・生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を目指すことから、筋道を立てて練習や作戦について話し合う活動などを通して、コミュニケーション能力や論理的な思考力の育成を促し、主体的な学習活動が充実するよう配慮するもの」とも述べられている（文部科学省，2018b；文部科学省，2019）。

以上のことから、スキーを含む課外活動には様々な教育効果があり、これから必要とされる資質・能力を育成するうえでも重要な活動の1つであることが分かる。さらに、それらを育成・指導する教員を養成するためには、大学における課外活動は必要不可欠であることから、体育・スポーツ系の大学、特に保健体育の教員免許を出している大学では、スキーを含む冬季実習を実施しているところが多い。それに伴って、大学におけるスキー実習の教育的効果についても多くの研究によって明らかにされており、加えて、同様にスキー実習の報告等もなされている（松尾ら，2016；片山ら，2019）。一方、東亜大学においては、これまで冬季実習の報告や調査はなされていない。そこで本論考では、2022年度の冬季実習についての報告を行い、今後の冬季実習のあり方について検討する。

2. 本学の2022年度冬季実習について

2-1. 本学における冬季実習の位置づけ

本学における冬季実習は、人間科学部スポーツ健康学科の開講科目であり、専門教育科目の1つとして位置付けられている。当学科は、保健体育の教員免許取得者、スポーツ指導者、健康づくりの指導者、アスリートを目指す学生が多く在籍しており、それに応じて冬季実習についても、冬季スポーツを通じて、技術を習得しなら、生涯スポーツへの理解を深め、また、学外での活動を通じて、社会生活に必要な規律やマナーといったスキルを学ぶための授業として設定されている。また、本学では、中学校・高等学校教諭第一種免許状（保健体育）が取得できる課程があり、そこでは冬季実習は教科及び教科の指導法に関する科目における、教科に関する専門的事項の体育実技の選択必修科目となっている。選択科目には、水辺・野外・冬季の3科目があり、教員免許取得希望者は、この3つの中から1つ以上の科目を選択することになっている。さらに、冬季実習は、スポーツ健康学科の卒業単位（選択科目）にも含まれている。しかしながら、新型コロナウイルスによる感染症の世界的な流行の影響を受け、2019年度以降開講されておらず、2022年度は2年ぶり開講となった。

2-2. 冬季実習までの事前指導

2022年度の冬季実習は、表1のスケジュールで行われた。まず、2022年の前期ガイダンスにて冬季実習の案内を学生に提示した。その後、後期ガイダンスにて、冬季実習の概要を説明し、履修指導を行った。実習が始まる約1か月前に、参加者を招集し、冬季実習のガイダンスを行った。このガイダンスでは、主に実習中の目的および、概要について、実習のスケジュール、ルール、スキーの基礎知識、準備物、グループ活動の確認を行った。また、大学の感染症対策本部によるガイドラインにおいて実習の実施にあたって参加者全員にPCR検査を実施することが求められていたことから、PCR検査キットを配布し、指定した日時に持参するように指示した。

表1 スケジュール

日時	内容
2022年4月6日	前期ガイダンス
2022年9月16日	後期ガイダンス
2022年12月19日	冬季実習ガイダンス
2023年1月27日	PCR検査キット配布
2023年2月2日	PCR検査キット回収
2023年2月8日	実習1日目
2023年2月9日	実習2日目
2023年2月10日	実習3日目
2023年2月11日	実習4日目
2023年2月13日	実習ノート提出

2-3. 冬季実習の目的

上記のように、本学の冬季実習の位置づけから、2022年度冬季実習の目的を「厳しい寒さの中、美しい白銀の世界にて、スキー技術を習得し、生涯スポーツとして理解を深めることを目的とする。また、社会生活に必要な規律とマナー、スキルを獲得することができる」とした。

2-4. 冬季実習の実施日程、実習地および参加者属性

2022年度の冬季実習は、2023年2月8日から2月11日（3泊4日）にかけて、岐阜県高山市奥飛騨温泉郷平湯に位置する平湯温泉スキー場で実施された。

実習の参加者は、学生17名、教員3名であった。参加した学生の内訳は、2年生5名、3年生4名、4年生8名であった。さらに、参加者のうち15名が保健体育の教員免許の取得希望者であった。しかし、4年生の中には、既に教員免許の履修条件を満している学生も数名おり、卒業単位の取得、卒業旅行（思い出づくり）の一環と、参加動機は様々であった。

現地での実習では、雪上でのスキー技術・理論の講習だけでなく、実習運営のマネジメント、学生の主体的な学びを深めるためのグループ活動も行わせた。

2-5. 冬季実習中の講習について

実習中のスケジュールは、表2の通りである。実習1日目と実習4日目は、主に移動日に当てた。但し、1日目に関しては、夕食後に講習を行った。講習の内容は、「役割グループ」での打ち合わせが中心で、2日目の夜の講習会の準備を行った。「役割グループ」とは、参加者を新幹線、バス、食事、講習の4つのグループに分け、実習中の場面ごとに中心となって物事を運営することを目的に組織されたものである。また、夜の講習会では、学生が主体となって、それぞれの「役割グループ」で1つ企画を考え、参加者に対し実践させることを行った。冬季実習のガイダンスの時間だけでは十分な打ち合わせができなかったため、1日目の講習の時間をこれにあてた（表2）。

2-6. 雪上講習について

2日目、3日目は、スキー場にてスキー講習（理論・実技）を行った。事前の自己申告調査により、今回の参加者のレベルは、初心者（この冬季実習で初めてスキーをする）が9名、初級者（ブルークボーゲンで滑ることができる）が4名、中級（パラレルターンに近い状態で滑ることができる）が3名、上級（パラレルターンでどのような斜面でも滑ることができる）が1名だったことか

ら、初心班（9名）、初級班（4名）、中・上級班（4名）の3班に分けて実習を行った。スキーの指導には、平湯温泉スキー場の岐阜県スキー連盟公認平湯温泉スキー学校のインストラクター2名と岐阜県スキー連盟認定指導員の資格を持つ教員1名の計3名が行った。その他教員2名は現地のインストラクターの班に1名ずつ配置した。

インストラクター3名は、スキーの技術指導だけでなく、スキーに関する基本的な知識、理論、雪山での楽しみ方なども適宜交えながら説明し、指導を行った。

2-7. 実習ノートについて

実習ノートは、要項、注意事項、役割、メモ、雪上講習の振り返りと最終レポートから構成されている。雪上講習の振り返りは講習終了後に宿舎に戻り、その日のうちに記入するよう指示をした。また、最終レポートに関しては、実習終了日から2日後の2月13日までに提出するように指示をした。

表2 実習中のスケジュール

1日目(2/8)	2日目(2/9)	3日目(2/10)	4日目(2/11)
7:45 新下関駅集合	7:30 朝食	7:30 朝食	7:30 朝食
移動 8:29 新下関 出発	8:30 ホテル出発	8:30 ホテル出発	8:45 ロビー集合
9:53 広島 乗り換え	9:00 講習スタート	9:00 講習スタート	移動 9:00 ホテル 出発
12:13 名古屋 到着	12:00 講習終了	12:00 講習終了	12:30 名古屋駅 到着
12:30 バス 出発	お昼	お昼	13:32 名古屋 出発
16:00 ホテル 到着	13:30 講習スタート	13:30 講習スタート	15:51 広島 乗り換え
	16:30 講習終了	16:30 講習終了	17:04 新下関 到着
	17:00 ホテル到着	17:00 ホテル到着	解散
18:30 夕食	18:30 夕食	18:30 夕食	
20:00 講習	おたのしみ①	おたのしみ②	
22:30 消灯	22:30 消灯	22:30 消灯	

3. 実習における学生の取り組み、学習成果、満足度調査について

実習終了日に実習における学生の取り組み、学習成果、満足度、次年度に向けた改善点等を調査するために、Google フォームによる Web 調査を行い、学生に回答してもらった。

3-1. 調査の目的

本報告は、2022 年度冬季実習における学生の取り組みと学修成果および満足度の調査の結果を基に、今後の冬季実習の在り方を検討するための一資料とすることを目的とする。

3-2. 調査方法

実習終了後に参加者に対し、アンケート調査を行った。

3-3. 調査対象者

調査対象者は 2022 年度冬季実習に参加した学生 17 名を対象とした。

3-4. 調査方法

Google フォームを用いたアンケート調査を行った。冬季実習の参加者全員に対し、実習終了後（11 日～13 日）の間で回答を求めた。

3-5. 調査内容

本調査は、学生の取り組み、満足度及び学修成果を測るために、田中・高見（2021）が作成した 12 項目を修正し、「プライベートでもスキーをしたいか」という 1 項目を加えた、計 13 項目で調査を実施した（表 3）。

田中・高見（2021）の 12 項目は、学生の取り組み 5 項目、満足度 4 項目、学習成果 3 項目から構成されている。

表 3 質問項目

カテゴリ	番号	質問内容	回答
学生の取り組み	1	雪上講習に積極的に取り組みましたか。	とてもそう思う／そう思う／どちらでもない／あまりそう思わない／そう思わない
	2	夜の講習や実習ノートの作成にしっかり取り組みましたか。	とてもそう思う／そう思う／どちらでもない／あまりそう思わない／そう思わない
	3	体調の管理やけがの予防に努めましたか。	とてもそう思う／そう思う／どちらでもない／あまりそう思わない／そう思わない
	4	宿舎では、部屋を整理整頓し、規律を守って生活できましたか。	とてもそう思う／そう思う／どちらでもない／あまりそう思わない／そう思わない
	5	実習(全体)に積極的に取り組みましたか。	とてもそう思う／そう思う／どちらでもない／あまりそう思わない／そう思わない
満足度	6	講義内容は満足できるものでしたか。	とてもそう思う／そう思う／どちらでもない／あまりそう思わない／そう思わない
	7	夜の講義内容は満足できるものでしたか。	とてもそう思う／そう思う／どちらでもない／あまりそう思わない／そう思わない
	8	宿舎での生活は快適で、満足できるものでしたか。	とてもそう思う／そう思う／どちらでもない／あまりそう思わない／そう思わない
	9	実習全体を通して満足できる内容でしたか。	とてもそう思う／そう思う／どちらでもない／あまりそう思わない／そう思わない
学修成果	10	スキーの安全・快適に実施するための知識や技能が身につきましたか。	身についた／ある程度身についた／どちらかといえば身についた／どちらかといえば身につけていない／あまり身につけていない／身につけていない
	11	自分の立てた目標をどれだけ達成することができましたか。	完全に達成できた／ある程度達成できた／どちらかといえば達成できた／どちらかといえば達成できなかった／あまり達成できなかった／全く達成できなかった
	12	団体行動や他の仲間との共同生活はしっかり実践できましたか。	しっかりと実践できた／ある程度実践できた／どちらかといえば実践できた／どちらかといえば実践できなかった／あまり実践できなかった／全く実践できなかった
その他	13	プライベートでまたスキーをしたいと思いませんか。	とてもそう思う／そう思う／どちらでもない／あまりそう思わない／そう思わない

3-6. 分析方法

全体の傾向を把握するために全ての項目において単純集計を行った。

3-7. 結果・考察

3-7-1. 対象者の属性について

本実習の参加者は、男子学生12名、女子学生5名の計17名であった。学年は、4年生8名、3年生4名、2年生5名であった。このうち、教員免許取得希望の学生は15名であった。また、スキーレベルについては、自己申告とし、その結果、初心者9名、初級者が4名、中級者3名、上級者1名であった（表4）。

表4 参加者

学生	性別	学年	スキー経験	教員免許
A	男	4	中級	-
B	男	4	上級者	○
C	男	4	初級者	○
D	男	4	初心者	○
E	男	4	初心者	○
F	男	4	初級者	○
G	男	4	初心者	○
H	男	4	初心者	○
I	女	3	初心者	○
J	男	3	中級	○
K	男	3	初心者	-
L	男	3	初心者	○
M	男	2	中級	○
N	女	2	初級者	○
O	女	2	初心者	○
P	女	2	初心者	○
Q	女	2	初級者	○

3-7-2. アンケート調査結果・考察

①学生の取り組みについて

学生の取り組みは、表3の①～⑤の5項目から構成されている。その集計結果を図1にまとめた。図1より、項目①、②、③、⑤の項目について、とてもそう思う、そう思うと回答した学生が80%以上であった。しかし、項目の④宿舎では「部屋を整理し、規律を守って生活できたか」については、52.9%（n=9）の学生がとてもそう思う、そう思うと回答していないことが分かった。

このような結果になった理由として、今回の実習でルールを守れなかった学生が若干名いたことが挙げられる。集合時間に遅刻したことや、実習ルールを守れなかった学生が自分の行動を振り返り、他の参加者に迷惑をかけてしまったことから、そうでもない、あまりそう思わない、そう思わないと回答したと考えられる。

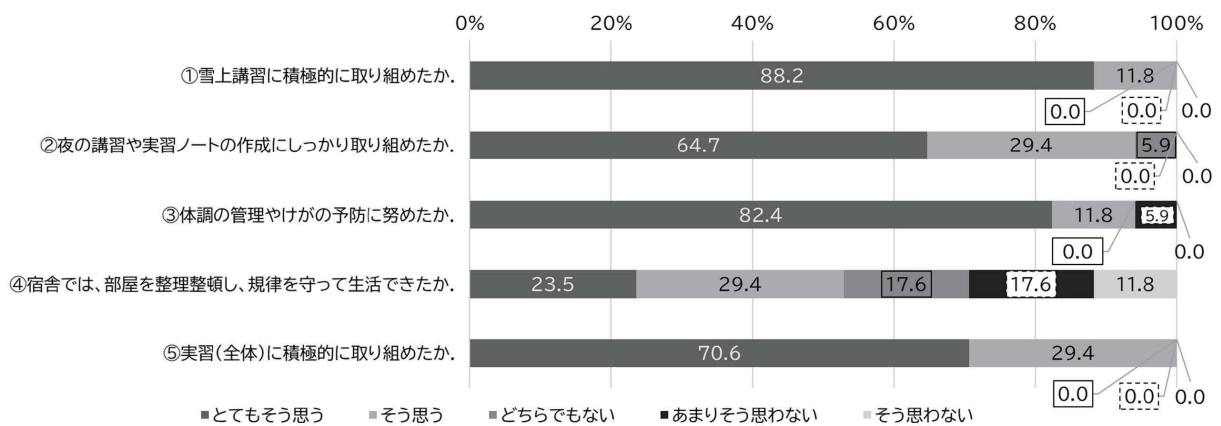


図1.学生の取り組み

②満足度について

満足度は、表3の⑥～⑨の4項目で構成されている。その集計結果を図2にまとめた。図2より、4項目の全てにおいて、とてもそう思う、そう思うと回答した学生が90%以上であったことから、今回の冬季実習の満足度は非常に高いことが分かる。

項目ごとにみると、夜の講習について満足度が他の3項目よりも高い数値を示している。夜の講習会については、4から5名のグループに分かれ、それぞれのグループが企画を考え、それを参加者の前で披露するといった活動を行った。他大学の夜の講習では、スノースポーツで起こりうる傷害や外傷に関する講習のほか、スキー技術について理論的に講習を行うことが多い。しかし、本学では、部活動同士、学年間の交流があまりなく、そのような機会もほとんどなかったため、むしろチームワーク力を高める目的で、あえてほぼ初対面の学生同士でグループ活動を実施した。その結果、各班が企画を考え、役割分担をし、実践することができた。また、各班の企画を皆で楽しみ、とても有意義な時間を過ごすことができた。そのため、夜の講習会に対する満足度も高かったのではないかと考える。

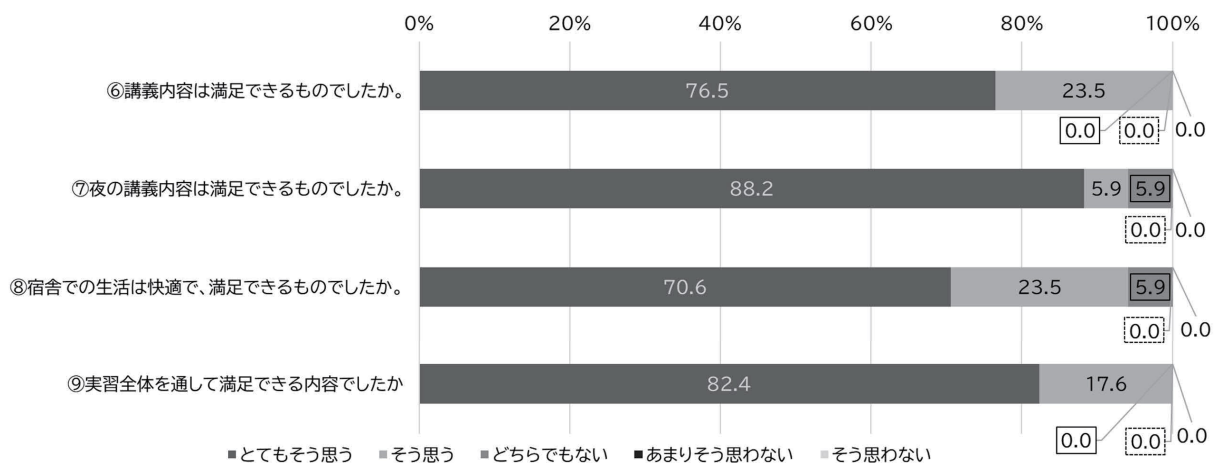


図2.満足度

③学修成果について

学修成果は、表3の⑩～⑫の3項目で構成されている。その集計結果を図3-1～3-3にまとめた。項目⑩、⑪に関しては、選択肢を先行研究に基づき、身についた群（身についた／ある程度身についた／どちらかといえば身についた）と身についていない群（どちらかといえば身についていない／あまり身についていない／身についていない）、達成できた群（完全に達成することができた／ある程度達成できた／どちらかといえば達成できた）と達成できなかった群（どちらかといえば達成できなかった／ほとんど達成できなかった／全く達成することができなかった）に分けた。その結果、身についた群、達成できた群ともに100%（n=17）であったことから、項目⑩⑪全ての学生の学修成果があったことが分かった。この結果より、スキー講習では、どの学生もインストラクターの指導を受けながら、誰もケガすることなく、安全に楽しくスキーをすることができたことから、学生全員が「身についた」と回答したと考えられる。さらに、現地のインストラクターは、スキーの指導資格を有し、指導歴も長いことから、スキーを安全・快適に実施するノウハウを持っており、楽しく学べるよう指導を工夫してくださったこともその要因として考えられる。また、各班に本学の教員を1人ずつ付け、指導の際、十分なサポートができていたことも要因として考えられる。

⑪に関しては、最終的に初心者の学生はリフトに乗って自力で滑ることができるようになり、初級、中級、上級の学生は、更なるスキー技術を身につけることができたことで、どの学生もこの2日間で上達を実感できたことから、達成することができた群が100%となったと考えられる。また、スキー技術だけでなく、集団行動、グループ活動など、冬季実習全体を通して、学生が個人的にも成長することができたと感じ得たこともその要因として考えられる。

しかし、今回の実習では、実習ノート等に目標を書かせたり、宣言させたりすることはなく、学生自身で考え、学生自身の判断によって回答させたため、その内実に不明瞭なところがあったことは否めない。

以上のことから、アンケートの結果より、項目⑩、⑪の学修成果があったと考えられる。

一方、項目⑫に関しては、実践できた群（完全に実践することができた／ある程度は実践できた／どちらかといえば実践できた）と実践できなかった群（全く実践することができなかった／ほとんど実践できなかった／どちらかといえば実践できなかった）に分けて調査した。その結果、実践できた群は70.5%（n=12）、実践できなかった群は29.5%（n=5）であった。このことより、学生の取り組みの項目4と同様なことが考えられる。集合時間への遅刻、実習ルールを守れなかったことが結果として現れたと考える。

しかし、項目⑫は、項目⑩、⑪と比較すると、若干数値が低いですが、70%の学生の学修成果はあったことから、この実習における学生の学修成果はあったと考えられる。

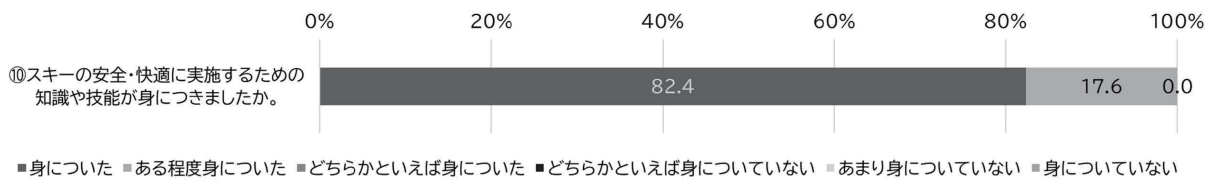


図3-1.学修成果

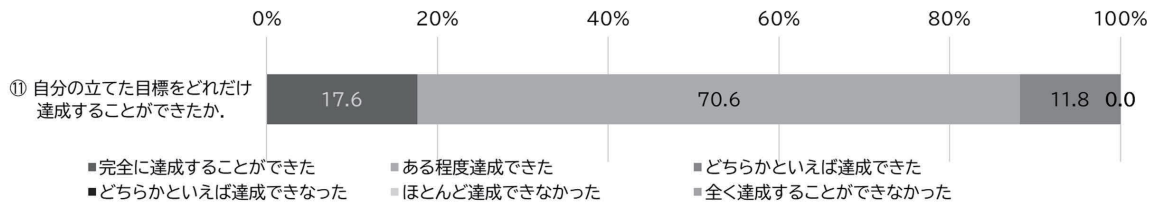


図3-2.学修成果

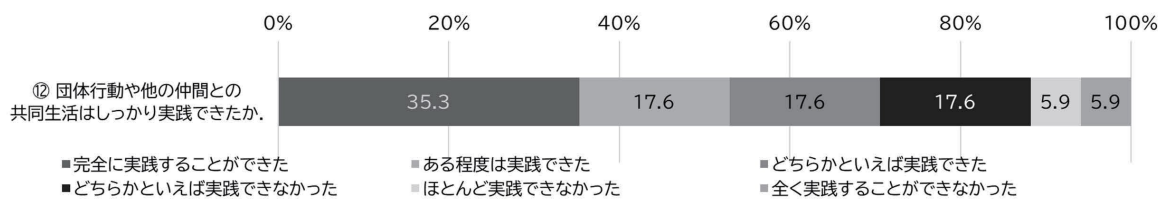


図3-3.学修成果

④プライベートでのスキー実施について

今回の冬季実習を通して、プライベートでもスキーをしたいと思うかについて、とてもそう思うと回答した学生は58.8% (n=10) であり、そう思うと回答した学生は41.2% (n=7) であった(図4)。このことから、全員の学生がまた、スキーをプライベートでも行ってみたいと思っていることが分かる。今回の実習は、学生の取り組み、満足度も高く、学習成果もあったことから、全体の満足度は非常に高いものとなった。さらに、スキー技術が上達したこと、スキーの楽しさを見いだせたことがプライベートでもスキーをしたいと思うようになったのではないかと考える。



図4.プライベートでのスキー実施について

4. まとめと今後の課題

2023年4月29日には、水際対策が解除され、海外旅行にも行けるようになり、現在は国内外で旅行する人たちが増加している(国土交通省, 2023)。また、2023年3月13日より、マスクの着用は個人の主体的な選択を尊重し、個人の判断に委ねることが基本となった(厚生労働省, 2023)。このことから、世間を騒がせていた新型コロナウイルスによる感染症は、ようやく収まり始め、日

常生活もコロナ禍以前の状態に戻りつつあるように思われる。冬季実習も今後比較的制限なく実施できるようになることが予測される。それゆえ、今回以上の取り組みを行っていく必要があると考える。

まず、今回の調査結果より、学習成果に関して、項目⑩の自分の立てた目標をそれだけ達成することができたかという問いに対して、ある程度達成できたと回答した人が70.6% (n=12)であったことから、2023年度以降は、事前に学生自身で冬季実習における目標を立てた上で参加させるようにする必要がある。そのようにすることで、学生自身も意識的に目標に取り組み、参加できるようになると考える。そのためには、実習ノートに記載する欄を作成し、事前ガイダンス等で目標を立てる機会を設ける必要がある。そして、その目標がどのように達成できたかを振り返ることで、学生自身の学習効果もさらに高められるのではないかと考える。

また、項目④と項目⑫の規律、集団行動についてマイナス評価を行った学生が若干名見られたことから、事前に、実習当日の夜の講習の場において再確認し、実習の意義を説明することが必要であるように思われる。また、本実習は教職課程の選択必修単位であることから、学生に責任感、リーダーシップ、教員としてのマネジメント能力等を身につけさせる必要もある。そのためには、学生にも具体的な役割を与え、この冬季実習をもっぱら大学教員のみが運営するというのではなく、学生にも企画や準備の段階から参加させ、一緒に実習を作り上げていくような仕組みが必要である。他大学の冬季実習では参加者が100名以上いるところも多く、そこでは具体的な役割を与えたり、運営をすることは難しいと思われる。それに対して本学の場合、冬季実習の参加者も20名前後であることから、大学教員による綿密で行き届いた指導ができ、それゆえ学生に総合的な実践力を身につけさせ、より一層特色のある実習を実施することができるのではないかと考える。とりわけ、学生の主体性や自主性が求められている昨今の教育にあって、こうした資質能力を身につけることにおいても、本実習は大きな意味を持つものと思われる。

さらに、他大学においては、冬季実習前後や冬季実習中にスキーで起こりうる傷害や外傷、救急法等の講習会を実施しているところが多い。このようなスキー場や実習中に起こりうる事態に備えたりスクマネジメント講習も取り入れることで、さらに身になる実習になるのではないかと考える。東亜大学には医療学部救命救急コースがある。そこで、その専門教員に事前講習を依頼し、実施することも検討していく必要があるように思われる。

以上のことから、2023年度以降の冬季実習は、2022年度の冬季実習の反省を踏まえ、一層学生の主体性に基づいた実習となるように善処していきたいと思う。



写真1 冬季実習写真

5. 引用参考文献

- 株式会社 Pioneerwork (2022) 「スキー・スノーボードとスキー場に関する意識調査 22-23」
<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000014.000058215.html> (参照日: 2023年2月21日)
- 片山靖富, 小木曾一之, 叶俊文, 佐藤武尊, 中村哲夫, 元塚敏彦, 吉田直樹. (2019) 「大学体育授業の「スキー実習」がもたらす教育効果」『皇學館大学教育学部学術研究論集』(1): 23-33.
- 熊谷賢哉, 元嶋菜美香, 田井健太郎 (2022) 「スノースポーツ実習が心理的側面および社会的スキルに及ぼす影響—転地・プログラム参加効果および効果の持続性に着目して—」『長崎国際大学論叢』22: 21-30.
- 国土交通省 (2023) 「訪日外国人旅行者数・出国日本人数の推移」https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/in_out.html (参照日: 2023年6月1日)
- 公益財団法人全日本スキー連盟 (2018) 『日本スキー教程』山と溪谷社
- 公益財団法人日本生産性本部 (2020) 『レジャー白書 2020』生産性出版
- 厚生労働省 (2023) 「マスク着用の考え方について」https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kansentaisaku_00001.html (参照日: 2023年3月24日)
- 田井健太郎, 熊谷賢哉, 宮良俊行, 金相勳, 宮原恵子, 谷木龍男, 水野哲也 (2012) 「大学における野外実習の効果について—高等教育における身体教育あるいはフィットネス教育の基礎として」『長崎国際大学論叢』12: 15-23.
- 田中淳, 高見彰 (2021) 「本学のスキー実習における学生の取り組みと学修成果および満足度に関する報告」『国際研究論叢大阪国際大学紀要』34 (3): 127-135.
- 中澤史, 麓正樹, 谷木龍男, 山崎将幸 (2014) 「スキー実習による受講生の社会的スキル向上効果」『法政大学スポーツ研究センター紀要 Bulletin of Sports Research Center, Hosei University』32: 9-13.
- 新潟県 (2020) 「新潟県の学校体育 (令和3年度) について」<https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/263810.pdf> (参照日: 2023年3月1日)
- 松尾美香, 西村次郎, 山崎めぐみ, 望月雅光 (2016) 「大学における自然体験学習のねらいとその教育効果に関する研究—スキー実習を対象にして—」『岡山理科大学紀要 B 人文・社会科学』52: 49-59.
- 文部科学省 (2018a) 『【体育編】小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説』https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_010.pdf (参照日: 2023年3月1日)
- 文部科学省 (2018 b) 『【保健体育編】中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説』https://www.mext.go.jp/content/20210113-mxt_kyoiku01-100002608_1.pdf (参照日: 2023年3月1日)
- 文部科学省 (2019) 『【保健体育編 体育編】高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説』https://www.mext.go.jp/content/1407073_07_1_2.pdf (参照日: 2023年3月1日)
- 村本名史, 菊本智之, 瀧澤寛路 (2019) 「大学におけるスキーの体育授業での受講生による授業評価」『常葉大学健康プロデュース学部雑誌』13 (1): 65-74.
- ビーウェーブ (2022) 「意外と知らない? スキー場が多い都道府県はここ!」<https://skiski.jp/snowcomi/2017-001/> (参照日: 2023年2月24日)
-

Report on winter practice at the Department of Sports and Health, University of East Asia, 2022

Haruna MIZUNO

Department of Health and Sports, Faculty of Human Sciences, University of East Asia
h.mizuno@toua-u.ac.jp

【Summary】

The Department of Sport and Health, Faculty of Human Sciences at the University of East Asia held a winter practical training course for the first time in close to two years. This report summarizes the winter practical training course for 2022. In addition, we surveyed the participating students about their activities, learning outcomes, and satisfaction with the winter course. Based on the results of this survey, the ideal way for the Department of Sports and Health to conduct future winter practical training courses was discussed.

Keyword: Winter practice, ski